

素材にとらわれぬ

技術力を大川から

有限会社カネクラ加工

代表取締役 石橋 典広 さん

住所…大川市大字中古賀1048-1
TEL…0944-8717015
FAX…0944-8719331

今月の夢追い人は、有限会社カネクラ加工の石橋さんにお話を伺いました。

カネクラ加工は、創業して40年以上になるとのこと。

「私が小学生の頃に父が開業したのははじまりです。もとは別注家具の塗装を行っていましたが、そこからいわゆる家具の前板のNCルーター加工に業種転換をし、その後は自動車の内装、デッキボードなどの加工を始めて、そのまま車業界に進出していきました。特に自動車の内装に関しては、軽量化の流れで木製品が使われることが少なくなっていくのもあり、それに合わせて業態もスライドしていきましたね。いまは自動車の様々な内装部品を加工しています。シートなどの縫製も自社でできるようにになりましたね」

いまは二代目として会社を引っ張っていく立場となった石橋さん。学校を卒業してすぐに会社に入られたのでしょうか。

「卒業して数年は福岡市で木材専門の商社に勤めていました。まったく継ぐ気がなかったというわけではなく、いずれは大川に戻るつもりではいましたね。ただ思ったより早く、そのタイミングが訪れ、現在に至ります」

以前は大川市向島で工場を持たれていたのですが、車業界に進出するにあたって大川家具工業団地内へ移転されたそうです。

「二期24時間稼働できるというのが第一条件に掲げられていたので、それができる所を大川市内で探したら、この団地内が該当しました。いまは24時間稼働はしていません

が、以前はいまよりも少ない人数で木質の加工をやっていたでしたね」

大川に戻られてすぐは現場に入られていた石橋さんですが、現在はほとんどないとのこと。

「私が作ると不良品ができちゃうんで、やらないでくれと従業員から言われていますね(笑)」

実際に会社を引き継がれたのは48歳頃とのこと。いま現在、石橋さんが仕事をする上で大切にしていることも伺いしました。

「車の部品になるので、仕事を依頼してくださる先方も品質コストを非常に重要視されます。製造する我々もそこにはとても気を使いますね」

また新技術を搭載した車両



など日々目まぐるしく進歩を遂げる業界ならではの課題も多いとのこと。

「先方の要求が予想よりも高いことは多々ありますね。そういういったときには会社一丸となって、従業員と知恵を出し合い解決の道を探ります」

いまは人工衛星の事業にも関わられているカネクラ加工。どういった経緯で関わられることになったのでしょうか。

「もともと円陣スペースエンジニアリングチーム（以下eISET）という九州で宇宙開発を目指すNPO法人と面識があり、今回の衛星に関してもeISET経由で携わることになりました。※

QPS研究所は現在、小型のリーダー衛星のプロジェクトを進めています。eISETは協力会社として最初の段階から話し合いに参加して、一緒に開発を進めています。そのなかで、衛星のアンテナ部分を作るにあたり、縫製が必要な部分が出てきて、縫製業者を探されている際に弊社の名前が上がり、話を聞いてもらえませんか？と連絡がありました。なかなか唐突なお話でしたね。4年位前なので、2016（2017年頃の話ですね。最初にお話を頂いたときはとにかく疑問でした。人工衛星に縫製が必要なのか？って思いましたね。衛星って聞くと、まず金属の塊

だなというイメージがあると思うんです。私もそうでした。だから何をどうやって縫うんだろうと。よくよく話を聞いたら、実はアンテナ部分特殊な金属メッシュの布で作りたい、それを繋ぎ合わせる縫製してもらえないかということでした。見た目はストッキングのような感じなんです。が、特殊な素材だったので、正直そんなもの縫えるのかなとは思いましたね」

さらに話を伺っていくと、すでに様々なところで縫製業者を探されて、最後の頼みとしてカネクラ加工へ来られたこともわかったそうです。

「押し迫ってる状況でもあったようで、とりあえずやれるかどうかわかりませんが、まず材料を貸してください。縫えるか縫えないかわからないので、うちのミシンで縫ってみます。それを見て判断しましょう。もしうちで縫えなかったら、お断りしますよ。というお話でやってみたら、なんとか縫うことはできたので、先方の要望・要求には応えられるようにやってみましょうということになりました」

無事カネクラ加工で縫製が行われたアンテナ部分ですが、実際の人工衛星ではどういった用途に用いられるのでしょうか。

「よくTVなどで見る気象衛星の画像は衛星に取り付けた

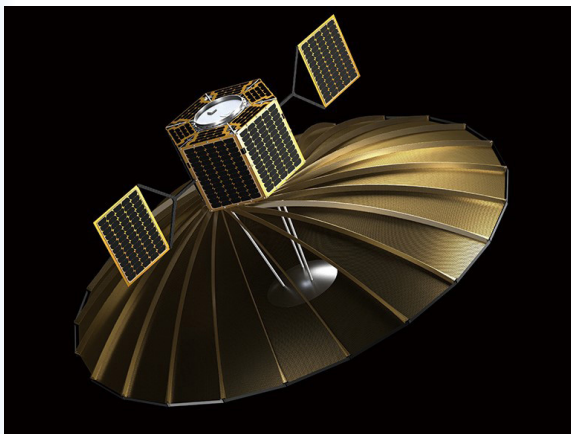
カメラで撮るのですが、夜間や悪天候時は地上が観測できません。この衛星は、リーダーを地上から跳ね返ってきた情報を画像化するんです。アンテナ部分です。例えば雲があっても透過して地上を観測することが出来ます。QPS研究所はこの衛星を2025年までに36機打ち上げる予定です。そうすると、例えば地震や台風、土砂崩れや洪水などの災害状況を夜間や悪天候でも約10分おきに観測ができるようになるので、何処でどんな災害が発生しているのかをほぼリアルタイムに確認ができ、救援活動や物資の輸送、避難経路の確保に役立てることが出来ます。アンテナはリーダーを使用するのに大切な役割があります。リーダーを飛ばして、地面の形状なり色んなものの観測したものをまた反射で戻して、それをアンテナ部分で拾ってデータ取得するんです。受信するアンテナがなめらかで綺麗なお椀型でないといけないので、アンテナを飛ばしてもしつかりした情報は得られない。だからこそ大変でした。金属ですが引張つたら破れてしまうくらい薄くて伸びにくい素材です。アンテナはロケットで打ち上げるときは小さく畳んでおいて、宇宙にあがったときに、バネの力を使って回転させながら傘みたいに開かせるんです。さらに、動きながら開いた

ときに皺がないような形にならないといけない。かといって材料は伸びにくいので、妙な反動などで破けないように上手く糸の調子を調整して、糸に弾力を持たせて反動を吸収させて、材料を綺麗に皺なく破れなくびつちり張らせることができる、という感じですね」

実際にこのやり方は1号機、2号機のアンテナに採用され、いま現在も宇宙で運用されているそうです。1号機、2号機の打ち上げの瞬間はご覧になられたとのこと。

「実際に打ち上がった瞬間は、関わった者として、やっぱり嬉しかったですね。一番緊張するのは、宇宙に上がってしまったからでした。宇宙に放たれるまでは、ロケットからのリアルタイムな映像で見ることができました。ただそこからは先、実際にアンテナが開くまで数日あるので…。上手く開いてくれませうように、と祈ってましたね」

様々なシーンで活躍しているカネクラ加工の部品。そんな部品を生み出している石橋さんの夢はなんでしょうか？



アンテナ部分を広げた人工衛星（イメージ）

「52歳になりましたが、この歳になると夢というよりも平穩無事に生きていければいいかなと考えるようになってしまいましたね。平穩に生きていくなかでも、仕事では車業界や人工衛星にもちよつと携わらせていただいています。うちの強みといえば品質コストや特殊な縫製です。布だけではなく、ボードや板、木も縫います。そういった特殊な技術を受け継がせていきたいですね。またそういう技術を持った人たちが育つ、大川やその周辺に定着してくれるような会社になりたいですね。木工業が有名な大川ですが、大川にもこういう企業があるんだ。じゃあ地元で頑張ってみようという人が増えてくれたら嬉しいです」